

しかも、五十一歳のときには中納言、五十三歳のときには権大納言に昇進せしめられた。普通なら十年以上かかってもなかなかむつかしい頭職に、わずか数年で昇ってしまったのである。さらに宇多天皇が、讓位のさい若い藤原時平と円熟した道真とに詔命を下して後事を託されると、それにしたがって醍醐天皇は、時平を左大臣に、道真を右大臣に任命しておられる。このときに道真五十五歳、左大臣の時平は二十九歳であるから、大臣としての役割は、まだ若い時平よりも熟年の道真に期待されていたかと思われる。

このように道真は、宇多天皇の治世から醍醐天皇の初めにかけて、もつとも重要な政治の地位を占め、現に大きな働きをしたのである。

このようにして讃岐で四年間苦勞した道真は、四十六歳のとき都へ戻つて、ふたたび大へんな昇進の時期を迎える。それまで非常な力をもっていた関白太政大臣の藤原基経が、寛平三年（八九一）に薨じたので、当時二十五歳の青年天子宇多天皇は、いよいよ理想の政治を進めようとして、まさに円熟した道真を抜擢されたのである。

すなわち、基経の亡くなったわずか一カ月後、道真は藏人頭という大役に補された。これは天皇側近の秘書官長とでもいうべき重要なポストである。ついで四十九歳のとき、参議に任じられ、加えて式部大輔・勘解由長官・春宮亮などの要職をも兼ねている。

#### 4 異例の昇進